

おしぼりは必要ですか？



2002～2003年度におしぼりレンタル協同組合（現在は東日本おしぼり協同組合と合併）ホームページ上で調査実施

れる会社が増えているという。

おしぼりの歴史をたどる

なぜ日本にこれほどおしぼりが定着したのか。

「日本は四季のはっきりした風土ですから、暑いときは汗をぬぐう爽快感があるし、冬は温かさが気持ちいい。また、日本人の所作におしぼりが合っているんでしょね。人と人が出会ったときに、本題に入る前にひと呼吸おく。ためが入る。お茶とおしぼりがセットになって、いい間になるんだと思います」

そう教えてくれたのは、おしぼり文化に詳しい西内毅さん（東日本おしぼり協同組合理事長）。西内さんによれば、昭和三十年代に飲食店の数が増えるとともに、おしぼりも普及

当時流行した喫茶店では、コーヒー一杯でもおしぼりが出され、喜ばれていたという。

現在は首都圏だけでも日に六百万本ほど出荷されるというおしぼり。そのルーツは「古事記」の時代にまで遡^{さかのぼ}るのだとか。

「お公家さんが客人を家に招く際に提供した『塗れた布』がおしぼりの原点ではないか。日本にはもともと麻の文化があり、麻や綿の天然素材の肌触りに慣れ親しんできたDNAがあるんでしょう」

また、江戸時代の時の茶屋には、水を張った桶と手ぬぐいが用意されていた。旅人は手ぬぐいをしぼって汚れた手足をぬぐっていたという。この「しぼり」に「お」を加えたのが、おしぼりの語源だとか。

「ようこそいらっしゃいました」とお客様を迎える心に表裏なし。おしぼりは日本特有のおもてなしの心。



おもてなしの心なんです」

寒い冬、おしぼりの温かさに思わず「ふう〜」と安堵の息がもれる。手や口をふく機能を越えて心地よさを感^{かん}じるのは、表裏なしの「おもてなし」の心があるからこそだろう。

使い捨てではなく、洗浄して繰り返し利用されることから、環境面でも見直されている布おしぼり。ヨーロッパを中心に海外でも関心が高まり、すでに貸しおしぼり業者も生まれているそう。

和食とともに、日本発「おもてなしの心」が海を越え、今や世界に広がりつつある。